戰があれば、それは單なる偶然の過失として、無論直ちに回復ざるべきものと確信された事實を見よ。又其の四百年以上も全然このブリテン三界を支配し、一方には、遙かに遠き小亞細亞の果まで勢威を張り、有らゆる形體に於ける經營統治に曾て他の企及を許さざりし才力の絶倫を見よ。此の驚へべき大組織は實に永世不朽の構造と思はれてゐた。此の大帝國の盛時に生れた羅馬市民が、其の佳麗にして端正なる都市を見、其の道路を見、其の水道を見、其の橋梁を見た時、此の偉觀の衰滅する事があらうとは、蓋し想像せられなかつたであらう。近代の有らゆる諸帝國の如きは、之に比すれば實に蕈の群である。而も其の興る事の遲々として且つ壯大であつたと同じく、其の亡びる事も亦遲々として且つ壯大であつた。

經濟の挽臼は神の挽臼と同じく、其の挽くことは遲々としてゐるが、其の碎くる事は極めて細かである。奴隷耕作と奴隷製造とは、當時の最も優秀なる人物の目にも永久に持續すべき者と見え、又其の最後の破滅の直ぐ前に於いて最も鞏固に見えたが、而もそれが最初から働いてゐた經濟的原因の爲に、遂に其の沒落に到達した。只に伊太利ばかりでなく、歐洲の半は此の大奴隷農場の消耗的耕作の爲に、殆んど全く疲弊し盡してゐた。上には古今に類例なき奢侈と亂行とがあり、下には悲慘を極め失望に陷つた大貧困があつた。地方は過度なる收收に依つて出血し、奴隷は過度なる勞働に依つて衰弱してゐた。昔の獨立せし羅馬軍團は、今は變じて貧困なる傭兵となつてゐた。宦官宮人の徒は富者の雇學者となつてゐた。而も猶は何人も此の明かに近づきつゝある大破滅を先見する事が出來なかつた。

全建築の崩壞は遂に西部歐洲から起つて來た。北方の大蠻族は老朽せる帝國に侵入して來たが、數百年前、其の祖先が出會つたとは、頗る違つた狀態にぶつかつた。然し彼等の到來は只だ其の避くべからざる崩壞を早め、同時に其の再建の方位を供給したに過ぎない。當時の市民の多數に取つては、愛國は既に忘れられた言葉であつた。又かの憐むべき奴隷に取つては、如何なる變化も現在より惡い事は無いのであつた。斯くて結局、侵入の波又波を防止すべきだけの抵抗力がなく、大奴隷帝國は遂に衰れにも沒落した。次いで最期の過渡時代及び分裂時代があつた。そして其の外面混沌たるが中に、新組織が其根を張つて發芽した。道路は荒廢した。地方市場は必然的に羅馬市場に代つた。地方武力が帝國武力を壓伏した。斯くて結局、漸々の中に、封建制度が西部歐洲一般の社會組織となつた。（あと一回で完結）